

イギリス海岸

宮沢賢治

青空文庫

夏休みの十五日の農場実習の間に、私どもがイギリス海岸とあだ名をつけて、二日か三日ごと、仕事が一きりつくたびに、よく遊びに行つた処がありました。

それは本とうは海岸ではなくて、いかにも海岸の風をした川の岸です。北上川の西岸でした。東の仙人峠から、遠野を通り土沢を過ぎ、北上山地を横截つて来る冷たい猿ヶ石川の、北上川への落合から、少し下流の西岸でした。

イギリス海岸には、青白い凝灰質の泥岩が、川に沿つてずいぶん広く露出し、その南のはじめに立ちますと、北のはずれに居る人は、小指の先よりもっと小さく見えました。

殊にその泥岩層は、川の水の増すたんび、奇麗に洗われるものですから、何とも云えず青白くさつぱりしていました。

所々には、水増しの時できた小さな壺穴の痕や、またそれがいくつも続いた浅い溝、それから亜炭のかけらだの、枯れた蘆きれだのが、一列にならんでいて、前の水増しの時にどこまで水が上つたかもわかるのでした。

日が強く照るときは岩は乾いてまっ白に見え、たて横に走つたたび割れもあり、大きな

帽子を冠かむつてその上をうつつむいて歩くなら、影法師かげぼうしは黒く落ちましたし、全くもうイギリスあたりの白堊はくあの海岸かいがんを歩いていような気がするのです。

町の小学校でも石いしの巻まきの近くの海岸に十五日も生徒せいとを連れて行きましたし、隣となりの女学校でも臨海りんかい学校をはじめていました。

けれども私わたくしたちの学校ではそれはできなかつたのです。ですから、生れるから北上きたかみの河谷かこくの上流じょうりゅうの方にばかり居いた私たちにとつては、どうしてもその白い泥岩層でいがんそうをイギリス海岸と呼よびたかつたのです。

それに実際じつさいそこを海岸と呼ぶことは、無法むぼうなことではなかつたのです。なぜならそこは第三紀だいさんきと呼ばれる地質時代ちしつじだいの終り頃おわりころ、たしかにたびたび海の渚なぎさだつたからでした。その証しょうこ拠こには、第一にその泥岩は、東の北上山地のへりから、西の中央分水嶺ちゅうおうぶんすいりょうの麓ふもとまで、一枚まいの板いたのようになつてずうつとひろがつていました。ただその大部分だいぶぶんがその上に積つもつた洪積こうせきの赤砂あかじやりや礪ろ※、それから沖積ちゅうせきの砂すなや粘土ねんどや何かに被おほわれて見えないだけのはなしでした。それはあちこちの川の岸きしや崖がけの脚あしには、きつとこの泥岩が顔を出しているのでもわかりましたし、また所々ところどころで掘り抜き井戸いどを穿うがつたりしますと、じきこの泥岩層そうにぶつつかるのでもしれました。

第二に、この泥岩は、粘土と火山灰とまじったもので、しかもその大部分は静かな水の中で沈んだものなことは明らかでした。たとえばその岩には沈んでできた縞のあること、木の枝や茎のかけらの埋もれていること、とどこどころにいろいろ沼地に生える植物が、もうよほど炭化してはさまっていること、また山の近くには細かい砂利のあること、殊に北上山地のへりには所々この泥岩層の間に砂丘の痕らしいものはさまっていることなどでした。そうしてみると、いま北上の平原になつてゐる所は、一度は細長い幅三里ばかりの大きなたまり水だったのです。

ところが、第三に、そのたまり水が塩からかつた証拠もあつたのです。それはやはり北上山地のへりの赤砂利から、牡蠣や何か、半鹹のところにてなければ住まない介殻の化石が出ました。

そうしてみますと、第三紀の終り頃、それは或は今から五、六十万年或は百万年を数えるかも知れませんが、その頃今の北上の平原にあたる処は、細長い入海か鹹湖で、その水は割合浅く、何万年の永い間には処々水面から顔を出したりまた引つ込んだり、火山灰や粘土が上に積つたりまたそれが削られたりしていたのです。その粘土は西と東の山地から、川が運んで流し込んだのでした。その火山灰は西の二列か三列の石英粗面岩

の火山が、やつとしずまった処ところではありましたが、やつぱり時々噴火ふんかをやったり爆発ばくはつをしたりしてしまいましたので、そこから降ふつて来たのでした。

その頃世界ころせかいには人はまだ居いなかつたのです。殊ことに日本はごくごくこの間、三、四千年前までは、全く人が居まなかつたと云いいますから、もちろん誰だれもそれを見てはいなかつたでしょう。その誰も見ていない昔むかしの空がやつぱり繰り返くり返かえし繰り返くり返かえし曇くもったりまた晴れたり、海の一とこがだんだん浅あせくなつてとうとう水の上みづの上に顔を出し、そこに草や木が茂しげり、ことも胡桃くるみの木が葉はをひらひらさせ、ひのきやいちいがまつ黒にしげり、しげったかと思うと忽たちまち西にしの方かたの火山が赤黒い舌したを吐はき、軽石かるいしの火山礫かざんれきは空もまつくらになるほど降ふつて来て、木は押し潰つぶされ、埋うめられ、まもなくまた水が被かぶさつて粘土ねんどがその上の上につもり、全くまつくらな処ところに埋うめられたのでしよう。考かんえても変へんな気がします。そんなことはほんとうだろうかとか思おもわれません。ところがどうも仕方しかたないことは、私わたくしたちのイギリス海かい岸がでは、川の水からよほどはなれた処ところに、半分石炭せきたんにかわつた大きな木の根株ねかぶが、その根を泥岩でいがんの中に張はり、そのみきと枝えだを軽石の火山礫層かざんれきそうに押し潰つぶされて、ぞろつとならんでいました。尤ももそれは間もなく日光にあたつてぼろぼろに裂さけ、度々たびたびの出水つぎに次つぎから次と削けずられて行いきました、新らしいものもまた出て来きました。そしてその根株ねかぶのまわ

りから、ある時私たちは四十近くの半分炭化したくるみの実を拾いました。それは長さが二寸ぐらい、幅が一寸ぐらい、非常に細長く尖った形でしたので、はじめは私もは上の重い地層に押し潰されたのだろうとも思いましたが、縦に埋まっているのもありましたが、やっぱりはじめからそんな形だとは思われませんでした。

それからほんの木の实も見附かりました。小さな草の实もたくさん出て来ました。

この百万年昔の海の渚に、今日は北上川が流れています。昔、巨きな波をあげたり、じつと寂まつたり、誰も誰も見ていない所でいろいろに変わったその巨きな鹹水の継承者は、今日は波にちらちら火を点じ、ぴたぴた昔の渚をうちながら夜昼南へ流れるのです。

ここを海岸と名をつけたつてどうしていけないといわれましょうか。

それにも一つここを海岸と考えていいわけは、ごくわずかですけれども、川の水が丁度大きな湖の岸のように、寄せたり退いたりしたのです。それは向う側から入つて来る猿ヶ石川とこちらの水がぶつつかるためにできるのか、それとも少し上流がかなりけわしい瀬になつてそれがこの泥岩層の岸にぶつつかつて戻るためにできるのか、それとも全くほかの原因によるのでしょうか、とにかく日によつて水が潮のように差し退きす

るときがあるのです。

そうです。丁度一学期の試験が済んでその採点も終りあとは三十一日に成績を発表して通信簿を渡すだけ、私のほうから云えばまあそうです、農場の仕事だつてその日の午前で麦の運搬も終り、まあ一段落というそのひるすぎでした。私たちは今年三度目、イギリス海岸へ行きました。瀬川の鉄橋を渡り牛蒡や甘藍が青白い葉の裏をひるがえす畑の間の細い道を通りました。

みちにはすずめのかたびらが穂を出していつぱいにかぶさっていました。私たちはそこから製板所の構内に入りました。製板所の構内だということはおもくもくした新しい鋸屑が敷かれ、鋸の音が気まぐれにそこを飛んでいたのわかりました。鋸屑には日が照つて恰度砂のようでした。砂の向うの、青い水と救助区域の赤い旗と、向うのブリキ色の雲とを見たとき、いきなり私どもはスウェーデンの峡湾にでも来たような気がしてどきつとしました。たしかにみんなそう云う気もちらしかつたのです。製板の小屋の中は藍いろの影になり、白く光る円鋸が四、五挺壁にならべられ、その一挺は軸にとりつけられて幽霊のようにまわっていました。

私たちはその横を通つて川の岸まで行つたのです。草の生えた石垣の下、さっきの救

助区域の赤い旗の下には筏もちょうど来ていました。花城や花巻の生徒がたくさん泳いでおりました。けれども元来私どもはイギリス海岸に行こうと思つたのでしたからだまつてそこを通りすぎました。そしてそこはもうイギリス海岸の南のはじなのでした。私たちでなくたつて、折角川の岸までやつて来ながらその気持ちのいい所に行かない人はありません。町の雑貨商店や金物店の息子たち、夏やすみで帰つたあちこちの中等学校の生徒、それからひるやすみの製板の人たちなどが、あるいは裸になつて二人、三人ずつそのまつ白な岩に座つたり、また網シャツやゆるい青の半ずぼんをはいたり、青白い大きな麦稈帽をかぶつたりして歩いているのを見ていくのは、ほんとうにいい気持ちでした。

そしてその人たちが、みな私どもの方を見てすこしわらつていますのです。殊に一番いいことは、最上等の外国犬が、向うから黒い影法師と一緒に、一目散に走つて来たことでした。実にそれはロバートでも名の付きそうなもじやもじやした大きな犬でした。

「ああ、いいな。」私どもは一度に叫びました。誰だつて夏海岸へ遊びに行きたいと思わない人があるでしょうか。殊にも行けたら、そしてさらわれて紡績工場などへ売られ

てあんまりひどい目にあわないなら、フランスかイギリスか、そう云う遠い所へ行きたいと誰も思うのです。

私たちは忙しく靴やずぼんを脱ぎ、その冷たい少し濁った水へ次から次と飛び込みました。全くその水の濁りようときたら素敵に高尚なもんでした。その水へ半分顔を浸して泳ぎながら横目で海岸の方を見ますと、泥岩の向うのはずれば高い草の崖になって木もゆれ雲もまつ白に光りました。

それから私たちは泥岩の出張った処に取りついてだんだん上りました。一人の生徒はスイミングワルツの口笛を吹きました。私たちのなかでは、ほんとうのオーケストラを、見たものも聴いたことのあるものも少なかったのですから、もちろんそれは町の洋品屋の蓄音器から来たのですけれども、恰度そのように冷たい水は流れたのです。

私たちは泥岩層の上をあちこちあるきました。所々に壺穴の痕があつて、その中には小さな円い砂利が入っていました。

「この砂利がこの壺穴を穿るのです。水がこの上を流れるでしょう、石が水の底でザラザラ動くでしょう。まわったりもするでしょう、だんだん岩が穿れていくのです。」
また、赤い酸化鉄の沈んだ岩の裂け目に沿つて、層がずうつと溝になって窪んだとこ

ろもありました。それは沢山の壺穴を連結してちようどひようたんをつないだうに見えました。

「こう云う溝は水の出るたんびにだんだん深くなるばかりです。なぜなら流されて行く砂利はあまりこの高い所を通りません。溝の中ばかりころんで行きます。溝は深くなる一方でしょう。水の中をごろんなさい。岩がたくさん縦の棒のようになっていきます。みんなこれです。」

「ああ、騎兵だ、騎兵だ。」誰かが南を向いて叫びました。

下流のまっ青な水の上に、朝日橋がくつきり黒く一列浮び、そのらんかんの間を白い上着を着た騎兵たちがぞろつと並んで行きました。馬の足なみがかげろうのようにならちらちら光りました。それは一中隊ぐらいで、鉄橋の上を行く汽車よりはもつとゆるく、小学校の遠足の列よりはも少し早く、たぶんは中隊長らしい人を先頭にだんだん橋を渡って行きました。

「どこさ行くのだべ。」

「水馬演習でしょう。白い上着を着ているし、きつと裸馬だろう。」

「こつちさ来るどいいな。」

「来るよ、きつと。大てい向う岸のあの草の中から出て来ます。兵隊だつて誰だつて気持ちのいい所へは来たいんだ。」

騎兵はだんだん橋を渡り、最後の一人がぼろつと光つて、それからみんな見えなくなりました。と思うと、またこつちの袂から一人がだくでかけて行きました。私たちはだまつてそれを見送りました。

けれども、全く見えなくなると、そのこともだんだん忘れるものです。私たちはまた冷たい水に飛び込んで、小さな湾になつた所を泳ぎまわつたり、岩の上を走つたりしました。誰かが岩の中に埋もれた小さな植物の根のまわりに、水酸化鉄の茶いろな環が、何重もめぐつているのを見附けました。それははじめからあちこち沢山あつたのです。

「どうしてこの環、出来だのです。」

「この出来かたはむずかしいのです。膠質体のことをもう少し詳しくやつてからでなければわかりません。けれどもとにかくこれは電氣の作用です。この環はリーゼガングの環と云います。実験室でもこさえられます。あとで土壤のほうでも説明します。腐植質磐層というものも似たようなわけのできるのですから。」私は毎日の実習で疲れていましたので、長い説明が面倒くさくてこう答えました。

それからしばらくたつて、ふと私は川の向う岸を見ました。せいの高い二本のどんしんばしらが、互によりかかるとして一本の腕木でつらねられてありました。そのすぐ下の青い草の崖の上に、まさしく一人のカーキ色の将校と大きな茶いろの馬の頭とが出て来ました。

「来た、来た、とうとうやつて来た。」みんなは高く叫びました。

「水馬演習だ。向う側へ行こう。」こう云いながら、そのまっ白なイギリス海岸を上流にのぼり、そこから向う側へ泳いで行く人もたくさんありました。

兵隊は一列になつて、崖をななめに下り、中にはさきに黒い鉤のついた長い竿を持た人もありました。

間もなく、みんなは向う側の草の生えた河原に下り、六列ばかりに横にならんで馬から下り、将校の訓示を聞いていました。それが中々永かったのでこっち側に居る私たちは実際あきてしまいました。いつになつたら兵隊たちがみな馬のたてがみに取りついて、泳いでこっちへ来るのやらすつかり待ちあぐねてしまいました。さつき川を越えて見に行つた人たちも、浅瀬に立つて将校の訓示を聞いていましたが、それもどうも面白くて聞いているようにも見え、またつまらなそうにも見えるのでした。うるんだ夏の雲の下です。

そのうちとうとう二隻せきの舟ふねが川下からやって来て、川のまん中にとまりました。兵隊たちはいちばんはじめの列から馬をひいてだんだん川へ入りました。馬の蹄ひづめの底そこの砂利じゃりをふむ音と水のばちやばちやはねる音とが遠くの遠くの夢ゆめの中からも来るように、こつち岸ぎしの水の音を越こえてやって来ました。私わたくしたちはいまにだんだん深い処ふかところへさえ来れば、兵隊へいたいたちはたてがみにとりついて泳およぎ出ですだろうと思おもって待まっていました。ところが先頭の兵隊さんは舟ふねのところまでやって来ると、ぐるつとまわって、また向むこうへ戻もどりました。みんなもそれに続つづきましたので列れつは一つの環わになりました。

「なんだ、今日はただ馬を水にならすためだ。」私たちはなんだかつまらないようにも思いました。また、あんな浅あそい処ところまでしか馬を入れさせずそれに舟を二隻せきも用意よういしたので見てどこか大へん力強い感じもしました。それから私たちは養蚕ようざんの用ようもありましたので急いそいで学校に帰りました。

その次つぎには私たちはただ五人で行きました。

はじめはこの前の湾わんのところだけ泳およいでいましたがそのうちだんだん川にもなれてきて、ずうつと上流じょうりゅうの波なみの荒あらい瀬せのところから海岸かいがんのいちばん南のいかだのあるあたりへまでも行きました。そして、疲つかれて、おまけに少し寒さむくなりましたので、海岸の西の堺さかいの

あの古い根株ねかぶやその上につもつた軽石かるいしの火山礫層かざんれきそうの処ところに行きました。

その日私たちは完全かんぜんなくなるみの実みも二つ見附みつけたのです。火山礫層の上には前の水み増ずしの時の水が、沼ぬまのようになつて処々溜たまつていました。私たちはその溜り水から堰せきをこしらえて滝たきにしたり発電処はつでんしょのまねをこしらえたり、ここはオーバアフロウだの何なにの永ながいこと遊あそびました。

その時、あの下流かりゆうの赤い旗はたの立つているところに、いつも腕うでに赤いきれを巻まきつけて、はだかに半はん天てんだけ一枚まい着きてみんなの泳ぐのを見ている三十ばかりの男おとこが、一艇ちようの鉄艇かねてこをもつて下流の方のほから溯のぼつて来るのを見ました。その人は、町から、水泳すいえいで子供こどもらの溺おぼれるのを助たすけるために雇やとわれて来ているのでしたが、何ぶんひまに見えたのです。今日けふだつて実際じつさいひまなもんだから、ああやつて用もない鉄艇ちようていなんかかつかいで、動かさなくてもいい途方とほうもない大きな石を動かそうとしてみたり、丁度ちようど私どもが遊びあそびにしている発電所はつでんじょのまねなどを、鉄艇てつていまで使つかつて本統ほんとうにごつごつ岩いわを掘ほつて、浮岩うきいわの層のたまり水を干ほそうとしたりしているのだと思うと、私どもは実じつは少しおかしくなつたのです。

ですからわざと真面目まじめな顔をして、

「この水少し干ほしたほういいな、鉄艇てつていを貸かしませんか。」と云いうものもありました。

するとその男は鉄艇でとんとんあちこち突いてみてから、

「ここら、岩も柔やわらかいようだな。」と云いながらすなおに私たちに貸し、自分はまた上じょうり流ゆうの波なみの荒あらいところあつまに集あつまっている子供こどもらの方かたへ行いきました。すると子供らは、その荒いブリキ色の波のこつち側がわで、手をあげたり脚あしを伸の屋くるまやさんのようにしたり、みんなちりぢりに遁にげるのでした。私わたくしどもはははあ、あの男はやっぱりどこか足りないな、だから子供らが鬼おにのようにこわがっているのだと思おもつて遠くから笑わらつて見ていました。

さてその次つぎの日も私たちはイギリス海岸かいがんに行いきました。

その日は、もう私たちはすっかり川の心こころ持もちになれたつもりで、どんどん上流せの瀬せの荒あらい処ところから飛とび込こみ、すっかり疲つかれるまで下流かりゆうの方かたへ泳およぎました。下流であがつてはまた野蠻やばんじん人のようにその白い岩の上を走はり上流の瀬にとびこみました。それでもすつかり疲つかれてしまうと、また昨日けふの軽石層かるいしそうのたまり水の処ところに行いきました。救きゆう助じゆ係がかりはその日はもうちゃんとしてそこに来ていたのです。腕うでには赤あかい巾きんを巻まき鉄艇も持もつていまし

た。
「お暑あつうござんす。」私あいつが揜あいきつ揜あいきつしましたらその人は少しきまり悪わるそうに笑わらつて、
「なあに、おうちの生徒せいとさんぐらい大きな方かたならあぶないこともないのですが一寸ちよつと来て

みたところでは。「と云うのでした。なるほど私たちの中でたしかに泳げるものはほんとうに少かつたのです。もちろん何かの張合はりあいで誰かだれが溺れおぼれそうになつたとき間違まちがいなくそれを救すくえるというくらいのもは一人もありませんでした。だんだん談はなしてみると、この人はずいぶんよく私たちを考えていてくれたのです。救助区域くいきはずうつと下流いかだの筏いかだのところなのですが、私たちがこの気もちよいイギリス海岸に来るのを止めるわけにもいかず、時々別べつの用のあるふりをして来て見ていてくれたのです。もつと談はなしているうちに私はすつかりきまり悪くなつてしまいました。なぜなら誰でも自分だけは賢かしこく、人のしていることは馬鹿ばかげて見えるものですが、その日そのイギリス海かい岸がんで、私はつくづくそんな考かんがえのいけないいことを感かんじました。からだを刺さされるようにさえ思いました。はだかになつて、生徒せいとといつしよに白い岩の上に立つていましたが、まるで太陽たいようの白い光に責せめられるように思いました。全くこの人は、救き助ゆう区じょ域いきがあんまり下流かりゆうの方かたで、とてもこのイギリス海岸まで手が及およばず、それにもかかわらず私たちをはじめみんなこつちへも来るし、殊ことに小さな子供こどもらまでが、何べん叱しかられてもあのおぶない瀬せの処ところに行つていて、この人の形を遠くから見ると、遁にげてどての蔭かげや沢さわのはんのきのうしろにかくれるものですから、この人は町へ行つて、もう一人、人を雇やとうかそうでなかつたら救助の浮標ブイを浮うかべてもらい

たいと話しているというのです。

そうしてみると、昨日あの大きな石を用もないのに動かそうとしたのもその浮標の重りに使う心組からだったのです。おまけにあの瀬の処では、早くにも溺れた人もあり、下流の救助区域でさえ、今年になつてから二人も救つたというのです。いくら昨日までよく泳げる人でも、今日のからだ加減では、いつ水の中で動けないようになるかわからないというのです。何気なく笑つて、その人と談してはいましたが、私はひとりで烈しく烈しく私の軽率を責めました。実は私はその日までもし溺れる生徒ができたなら、こつちはとても助けることもできないし、ただ飛び込んで一縷に溺れてやろう、死ぬことに向う側まで一緒についていつてやろうと思つていただけでした。全く私たちにはそのイギリス海岸の夏の一刻がそんなにまで楽しかったのです。そして私は、それが悪いことだとは決して思いませんでした。

さてその人と私らは別れましたけれども、今度はもう要心して、あの十間ばかりの湾の中でしか泳ぎませんでした。

その時、海岸のいちばん北のはじめまで溯つて行つた一人が、まっすぐに私たちの方へ走つて戻つて来ました。

「先生、岩に何かの足痕あらんす。」

私はすぐ壺穴つぼあなの小さいのだろうと思いました。第三紀だいきの泥岩でいがんで、どうせ昔むかしの沼ぬまの岸きしですから、何か哺乳類ほにゅうるいの足痕あしあとのあることもいかにもありそうなことだけれども、教室でだって手しゅじゆう獣あしあとの足痕あしあとの図ずまで黒板こくばんに書いたのだし、どうせそれが頭あたまにあるから壺穴つぼあなまでそんな工合ぐあいに見えたんだと思ひながら、あんまり気乗りき乗りもせず(さげ)にそっちへ行つてみました。ところが私はぎくりとしてつつ立つてしまいました。みんなも顔色かおいろを変かえて叫さけんだのです。

白い火山灰層かざんばいそうのひとつところが、平たいらに水みづで剥はがされて、浅あさい幅はばの広い谷やのようになつていきましたが、その底そこに二つずつ蹄ひづめの痕あとのある大おおき五寸すんばかりの足あしあとが、幾いくつか続つづいたりぐるつとまわつたり、大おおきいのや小こさいいのや、実じつにめちやくちやについているではありませんか。その中には薄うすく酸化鉄さんかてつが沈ちん澱でんしてあたりの岩いわから実じつにはつきりしていません。たしかに足痕あしあとが泥どろにつくや否いなや、火山灰かざんばいがやつて来てそれをそのまま保存ほぞんしたのです。私ははじめは粘土ねんどでその型かたをとろうと思ひました。一人ひとりがその青い粘土あおねんども持もつて来たのですが、蹄ひづめの痕あとがあんまり深過ふかぎるので、どうもうまくいきませんでした。私は「あした石膏せっこうを用意よういして来よう」とも云いいました。けれどもそれよりいちばんいいことはやつぱ

りその足あとを切り取つて、そのまま学校へ持つて行つて標本ひょうほんにすることでした。どうせまた水が出れば火山灰の層そうが剥はげて、新らしい足あとの出るのはたしかでしたし、今のは構かまわないでいてもすぐ壊こわれることが明らかでしたから。

次つぎの朝早く私わたくしは実習じっしゅうを掲示けいじする黒板けいばんにこう書いておきました。

八月八日

農場のうじょう 実習 午前八時半より正午まで

除草じよそう、追肥つひひ 第一だいいち、七組

蕪菁播種かぶらはしゆ 第三、四組

甘藍かんらん 中耕ちゆうこう 第五、六組

養蚕実習ようさん 第二組

(午後イギリス海岸かいがんに於おいて第三紀偶蹄類きぐうていの足跡そくせき標本ひょうほんを採さい取しゆうすべきにより希望者きぼうしゃは参加さんかすべし。)

そこで正直せうじきを申もうしますと、この小さな「イギリス海岸かいがん」の原稿げんこうは八月六日あの足あとを見つける前の日の晩宿直室ばんしゆくちよくしつで半分書いたのです。私わたくしはあの救助係きゆうじゆがかりの大きな石を鉄槌かねてこで動かうごかすあたりから、あとは勝手に私の空想くうそうを書いていこうと思つていた

のです。ところが次の日救助係がまるでちがった人になってしまい、泥岩の中から空想よりももっと変なあしあとなどが出てきたのです。その半分書いた分だけを実習がすんでから教室でみんなに読みました。

それを読んでしまいかしまわないうち、私たちは一ぺんに飛び出してイギリス海岸へ出かけたのです。

丁度この日は校長も出張から帰って来て、学校に出ていました。黒板を見てわらっていましたが、それから繭を売るのが済んだら自分も行こうと云うのでした。私たちは新しい鋼鉄の三本鋏一本と、ものさしや新聞紙などを持って出て行きました。海岸の入口に来てみますと水はひどく濁っていましたし、雨も少し降りそうでした。雲が大へんけわしかったのです。救助係に私は今日少しのお礼をしようと思つてその支度もして来たのでしたがその人はいつもの処に見えませんでした。私たちはまっすぐにそのイギリス海岸を昨日の処に行きました。それからいいねいにあのあやしい化石を掘りはじめました。気がついてみると、みんな大抵ポケットに除草鎌を持ってきているのでした。岩が大へん柔らかでしたから大丈夫それで削れる見当がついていたのでした。もうあちこちで掘り出されました。私はせわしくそれをとめて、二つの足あとの間隔をはかったり、スケ

ツチをとつたりしなければなりません。足あとを二つつづけて取ろうとしている人もありましたし、も少しのところまでこわした人もありました。

まだ上流の方にまた別のところがあると、一人の生徒が云って走って来ました。私は暑いので、すっかりはだかになつて泳ぐ時のようなかたちをしていましたが、すぐその白い岩を走つて行つてみました。そのあしあとは、いままでのとはまるで形もちがひ、よほど小さかつたのです、あるものは水の中になりました。水がもつと退いたらまだまだ沢山出るだろうと思われました。その上流の方から、南のイギリス海岸のまん中で、みんなの一生けん命掘り取つているのを見ますと、こんどはそこは英国でなく、イタリヤのポンペイの火山灰の中のように思われるのでした。殊に四、五人の女たちが、けばけばしい色の着物を着て、向うを歩いていましたし、おまけに雲がだんだんうすくなつて日がまっ白に照つてきたからでした。

いつか校長も黄いろの実習服を着て来ていました。そして足あととはもう四つまで完全にとられたのです。

私たちはそれを汀まで持つて行つて洗いそれからそつと新聞紙に包みました。大きなのは三貫目もあつたでしょう。掘り取るのが済んであの荒い瀬の処から飛び込んで行くもの

もありました。けれども私はその溺れることを心配しませんでした。なぜなら生徒より前に、もう校長が飛び込んでいくゆつくり泳いで行くのでしたから。

しばらくたつて私たちはみんなでそれを持って学校へ帰りました。そしてさつきも申しましたようにこれは昨日のことです。今日は実習の九日目です。朝から雨が降つていますので外の仕事はできません。うちの中で図を引いたりして遊ぼうと思うのです。これから私たちにはまだ麦こなしの仕事が残っています。天気が悪くてよく乾かないで困ります。麦こなしは芒がえらえらからだに入つて大へんつらい仕事です。百姓の仕事の中ではいちばんいやだとみんなが云います。この辺ではこの仕事を夏の病氣とさえ云います。けれども全くそんな風に考えてはすみません。私たちはどうかしてできるだけ面白くそれをやろうと思うのです。

(一九二三、八、九)

青空文庫情報

底本：「イーハトーボ農学校の春」角川文庫、角川書店

1996（平成8）年3月25日初版発行

底本の親本：「新校本 宮澤賢治全集」筑摩書房

1995（平成7）年5月

入力：ゆうき

校正：noriko saito

2010年9月5日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

イギリス海岸

宮沢賢治

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>